

主題「『本質的な問い』を基に探究をデザインして、自分の考えを広げたり深めたりする生徒」の育成

1 主題設定の理由

「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」の育成が国語科の目標である。国語科での学びを、よりよい言葉の使い手として自己の生き方に生かすため、言葉の働きを捉えながら自分の考えを広げたり深めたりできるようにしていきたい。

「言葉の働き」の意味合いは、創造的・論理的思考、感性・情緒、コミュニケーションという3つの側面から規定されている。昨年度の実践では、教材との出会いによって生徒が抱いた「学習の疑問」を抽象的な概念と結び付けて探究した。実践後の課題として、探究の対象が探究を進めていくにつれて本文から離れていくことで、他者と協働する必要感が高まらず、言葉の働きを捉えながら自分の考えを広げたり深めたりすることにつながらなかったことが挙げられた。そこで、今年度は「本質的な問い」を基にすることで、生徒自身が言葉の働きを捉えながら探究をデザインできるようにする。「本質的な問い」について、石井（2024）は、その分野の基本的な問いや論点であり、常に立ち返って問い続けるものと説明している。「言葉の働き」の3つの側面に関わる問いを国語科における「本質的な問い」とし、自身で問い続けながら探究的に学ぶことで、自己の生き方や将来の社会での活用につなげることができるようにすると考える。

以上のことから、研究主題を「『本質的な問い』を基に探究をデザインして、自分の考えを広げたり深めたりする生徒」の育成とし、探究的な学びを実現するための具体的な手立てを通して実践研究を進める。

2 生徒がエージェンシーを発揮し、探究的な学びをデザインするための具体的な手立て

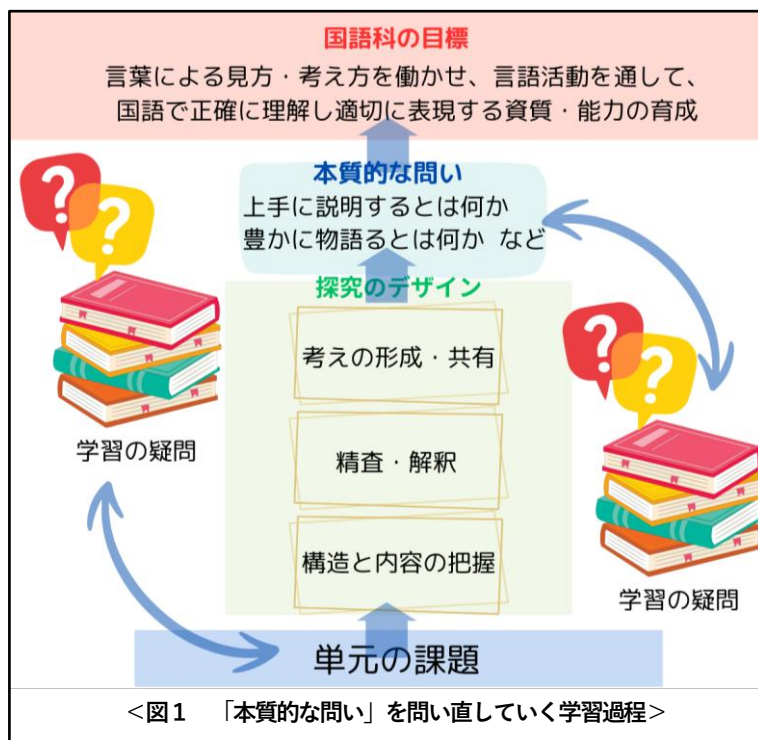
(1) 「本質的な問い」を問い続けていく学習過程

生徒は日常的に「話すこと・聞くこと」「書くこと」を行っている。そこで、「読むこと」の学習においてもった「本質的な問い」に関わる考えを、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」に生かしていくことで、実生活の経験と学びが結びつき、自己の生き方や将来の社会での活用につなげることができるようになっていくと考えた。

今年度は「読むこと」の学習に着目し、生徒自らが探究的に学べるようになることを目指す。具体的には、「読むこと」の説明的文章と文学的文章の学びにおいて、それぞれ「説明するとは何か」「物語るとは何か」などの「読むこと」の領域から「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域にも転移させていく包括的な「本質的な問い」を示す。

国語科の探究的な学びが現在の自分を見つめ直し、社会で生きることにつながったり自分自身の可能性を広げたりすることにつながるよう、様々な説明的文章や文学的文章に出会いながら、常に問い続けていく「本質的な問い」を基に本文を読み進めることができる学習過程にする（図1）。

各単元においては、国語科の指導事項と言語活動の要素を含んだ「単元の課題」を学習の枠組みとして示す。その枠組みの中で、生徒が抱く「学習の疑問」と国語科を



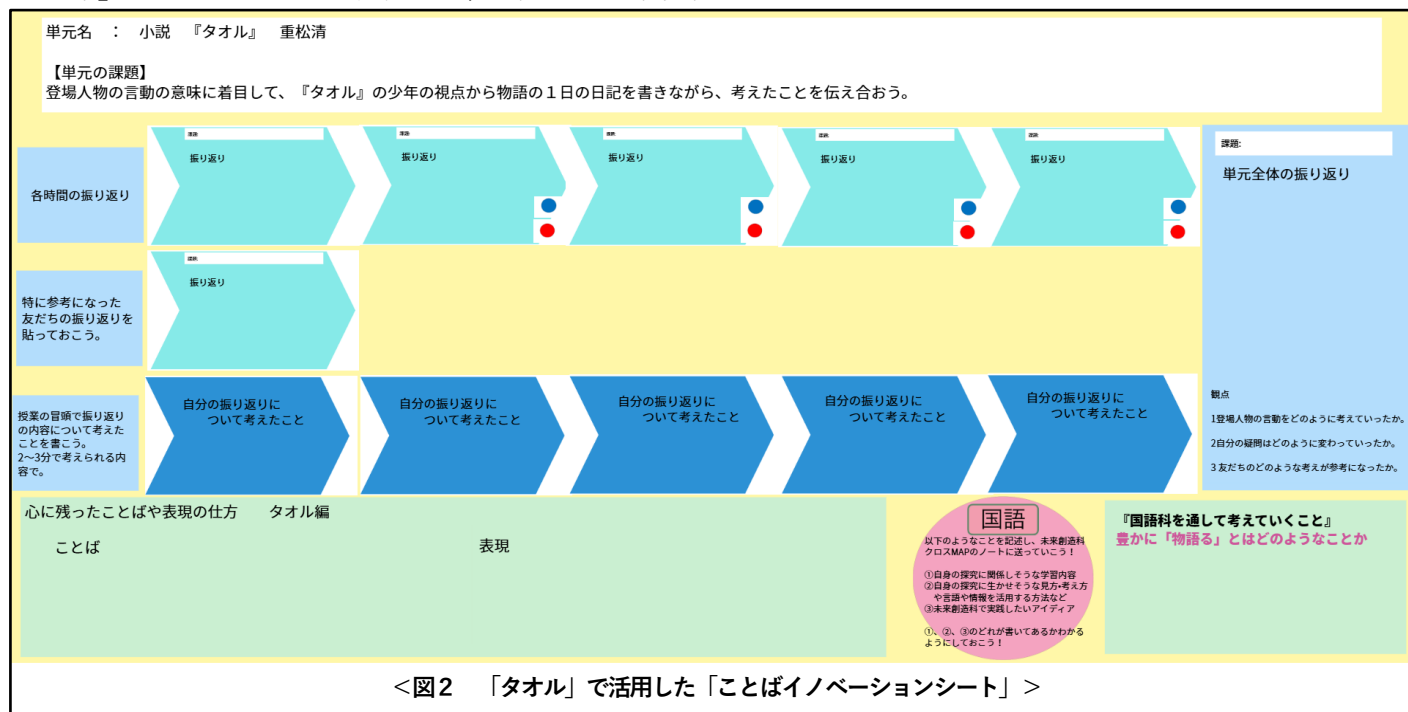
通して考えていく「本質的な問い」を関わらせて考え、生徒が「学習の疑問」を再考しながら探究の見通しをもって、自己の生き方や将来の社会での活用につながる探究ができるようになることを目指す。

1年生では、探究のモデルに沿って探究し「学習の疑問」を生徒自身で更新していく力を高めていく。2年生では、教師が探究のモデルを複数示し生徒が選択することで、探究方法を習得していく。3年生では、生徒同士で探究の内容や方法をデザインし、協働しながら探究していくことができるようにする。各単元の「振り返る」過程では、未来創造科の学びと結び付けながら「本質的な問い」についての考えを共有したり振り返ったりすることで、自分の考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(2) 振り返りの質を高めながら「本質的な問い」について考える「ことばイノベーションシート」

昨年度は、自分がどこまで探究を深められているのか自覚し、見通しをもてるよう「探究シート」を活用した。昨年度の課題として、最初に設定した「学習の疑問」が更新されないことによる、探究の停滞が挙げられた。具体的には、最初に設定した「学習の疑問」を解決することへの意識が強く、本文の多様な言葉について話し合うことができなかった。今年度は、生徒が他者の振り返りを生かしながら「言葉の働き」を捉え、探究的な学びをデザインすることができるようにし、「ことばイノベーションシート」として改編した(図2)。

まずシートの右下には、「本質的な問い」についての自分の考えを記すことで、探究的な学びの中で「本質的な問い」との関わりを毎時間意識できるようにし、探究の見通しをもちながら学びに向かえるようにする。単元の課題に対する毎時間の振り返りの際には、赤信号か青信号かを表示して提出できるようにする。赤は「悩んでいる、止まっている」、青は「順調に進んでいる」とし、生徒は振り返りの際に自身の探究の状況について示すことで、教師が適切な個別支援をできるようにする。また、「本質的な問い」に関わる本文の表現や言葉について、シート上に残していき単元ごとの振り返りで自分がどのように言葉を学んできたか捉え直すことができるようにする。探究してきた本文の言葉や表現が「本質的な問い」についての自分の考えとどのように関わっているか振り返っていくことで、探究的な学びをどのように進めたのか、つまづきをどのように解決したのか、「実現したい未来」に向けてどのような表現や言葉を学んだのか自覚化することができるようにする。



3 授業実践例

(1) 単元 文学的文章「タオル」重松清

(2) 実施時期/学年/配当時間 令和7年4月～5月/第2学年/全6時間

(3) 単元の目標

「タオル」を読んで、少年の視点から物語の1日の日記を書きながら、考えたことを伝え合う。

(4) 実践の概要

第1時は、事前に「タオル」を自宅で読み込み、疑問や感想を伝え合うことから始まる。生徒の「学習の疑問」を踏まえて、単元の課題として「登場人物の言動の意味を考えながら、少年の視点から物語の1日の日記を書き、考えたことを伝え合おう。」という課題を教師が提示した。生徒は「タオルはどのようなものを象徴しているのか」という疑問を本文に対して抱いていた。そこで本質的な問い「豊かに物語るとはどのようなことか」と関わらせて疑問を再考すると、「象徴的に描くことがどのように物語り方に影響するのか」「繰り返し同じものを出すことの物語としての良さはどのようなことか」などの考えが挙げられた。第2時は探究を行うにあたり、「学習の疑問」を整理してどのような共通点があるか分析をした。「繰り返し同じものを出すことの物語としての良さはどのようなことか」という疑問を設定した生徒は、まずはタオルがどのような場面で出ているのか考えていくことが大切だと気づいた。第3・4・5時は、探究を行った。毎時間、探究の成果を交流し個人で振り返りを行った。振り返りの場面では、「ことばイノベーションシート」を活用し、「タオルがあったからこそ少年が祖父の存在の大きさに気づいた」と青信号を示す生徒や「タオルをなぜ父親が取りに来たのか分からなかった」と赤信号を示す生徒がいた。第6時は、言葉について振り返ったり（図3）、未来創造科の探究と結び付け「本質的な問い」について再考したりした。内容についてだけでなく、「象徴的な表現をするからこそ、色鮮やかに心情を表現でき、様々な比喩や文章の進め方があるからこそ生きてくる。このように表現できると、思いを表現できる幅が広がり自分の人生をよりよくする。」と教材を通じて自身の学びや人生についても考えを深めることができた。

『物語』としていいなと思ったことばや表現の仕方 タオル編
・比喩表現 「…弟のように」（直喩）、「熱いものが…」（隠喩）→読者の想像の幅が広がる
・『象徴』を用いた文章の進め方 「納屋の脇に干したままタオル」＝「祖父の死を象徴するもの」→深く読める
・視点の切り替え 第三者（この物語の当事者でない人物）が語る場面と、少年が語る場面とがある→事実は客観的に、感情は主観的に表現できる

<図3 「タオル」で気づいた「言葉の働き」>

4 研究の成果と課題

成果として、「本質的な問い」を問い続けることによって、「言葉によって世界を作り出せる」、「日常生活のコミュニケーションでも感性が言葉にあらわれる」など文章から考えを広げ、自己の生き方や将来の社会につなげている記述が見られた。これは、「本質的な問い」が国語科の学びを「実現したい未来」につなげている姿である。

課題として、「ことばイノベーションシート」におけるつまずきの可視化により、デザインした探究の方法を上手く調整することができなかったことが挙げられる。どのようなつまずきに対して、どのように学びを調整したのか生徒間で上手く共有できていないことが原因だと考えられる。

5 今後の展望

今年度は「読むこと」の授業に焦点化して、生徒自身が国語科における探究的な学びをデザインする上で、「本質的な問い」を基にすることが有効に働いていることが分かった。今後は、「読むこと」を通して考えたことを、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」の資質・能力を育む上でより効果的に転移させていき、自己の生き方や将来の社会での活用につなげることができるようしていきたい。

<参考文献>

秋田喜代美・一柳智紀・坂本篤史・濱田秀行（2025）『これからの授業研究法入門～23のキーワードから考える～』, 東京図書.

群馬県教育委員会（2019）『はばたく群馬の指導プランⅡ』

石井英真（2024）今後の教育課程、学習指導、学習評価等の在り方に関する有識者検討会『学習指導要領の目標・内容の示し方について』

石井英真（2020）『授業づくりの深め方―「よい授業」をデザインするための5つのツボ―』, ミネルヴァ書房.

小林康宏（2024）『「言葉による見方・考え方」とは何か』, 明治図書.

文部科学省（2018）『中学校学習指導要領解説 国語編』, 学校図書.

白坂洋一・香月正登（2024）『リフレクション型国語科授業―「問い」をつくり、「問い」で読み合い、「問い」で評価する』, 東洋館出版社.